

菅平生き物通信

筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所

〒386-2204 長野県上田市菅平高原 1278-294 電話：0268-74-2002 FAX：0268-74-2016

2026年(令和8年)3月15日(日)発行
第111号 ©2026 菅平高原実験所
ウェブサイト：www.msc.tsukuba.ac.jp/



カモシカとシカ

筑波大学 元教授 町田 龍一郎



図1：ニホンカモシカ。足痕(A)、普通の糞塊(B)と特に大きくなった糞塊(C)

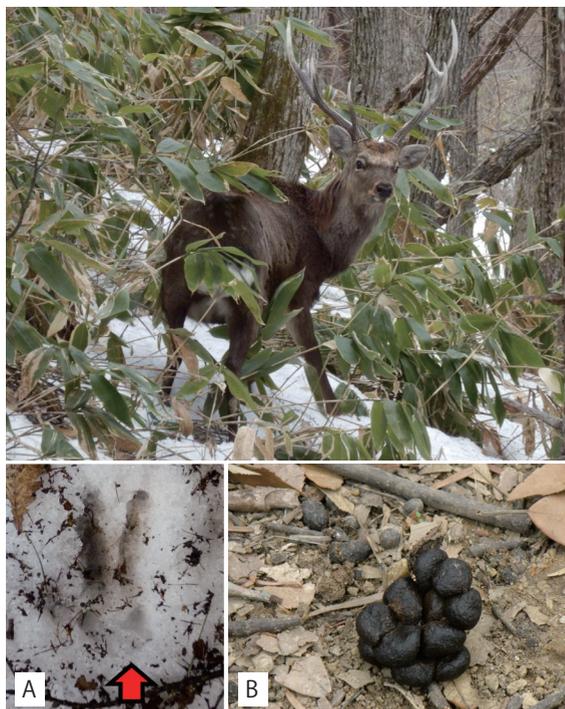


図2：ニホンジカ。足痕(A)と糞(B)

ニホンカモシカ(図1)とニホンジカ(図2)は『蹄が二つ』の偶蹄類で、さらに『胃が四つに分かれている』『一度飲み込んだ食物を口に返して噛みなおす「反芻」を行う』反芻動物に分類される近い仲間です。ニホンカモシカとニホンジカを比べてみます。

足痕はそっくり

ニホンカモシカもニホンジカも偶蹄類で、一对の大きな蹄が並び、それぞれの蹄の後に、しばしば「副蹄」(矢印)の小さな丸い跡が付きまします(図1A, 2A)。どちらの足痕も非常に似ていて区別は困難。その上に、彼らの棲んでいる環境には同様な特徴をもつイノシシもいますから、どうにもなりません。

糞の様子はずいぶん違う

足痕では区別が難しいですが、足痕の主がしたと思われる糞が見つけれたら一目瞭然。ニホンカモシカもニホンジカも糞は1〜1.5センチの卵型や砲弾型で似ていますが、糞の仕方が違います。

ニホンカモシカは腰を落として大量の糞を山のようにします(図1B)。縄張りの主張かもしれません。同じトイレを使い続けることもあるようで、糞の山はさらに大きくなることもあります(図1C)。

一方、シカは腰を落とすことなく、立ったまま、あるいは歩きながら糞をします。糞はコロコロと転がっているか、まともっていてもせいぜい数十個です(図2B)。真中に固まっ

「まず咲く」マンサク

筑波大学 技術専門職員

山中 史江

冬期休園中のこの季節、当施設の樹木園で花を咲かせている木があります。マンサクです。

名前の由来は他の植物に先駆けて開花する、「まず咲く」が訛ったものと言われています。その名のとおり樹木園では一番早く、例年3月初め、年によつては2月中旬に咲き始めることもあります。

花の直径は3センチくらい、細くて黄色い花びらが4枚あります。花びらの根もとの暗い赤色の部分は萼片で、これも4枚あります。香りはあまりなく、派手さより落ち着きのある印象です。

しかし、芽吹き前の林では、そこだけ光があたっているかのようによく目立ちます。この木が主役の瞬間を見逃してはいけません、毎年スノーシューをはいて会いに出かけます。

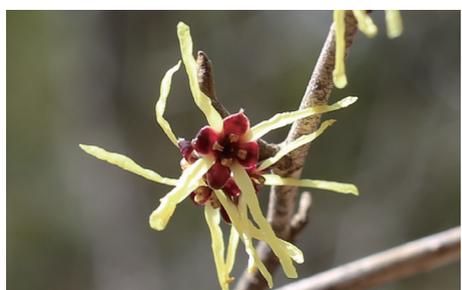


図3：花(2022年4月7日撮影)



図4：満開の枝(2025年4月22日撮影)



図5：マンサクイガフシワタムシ(左)とマンサクフクロフシアブラムシ(右)の虫こぶ

参考：湯川淳一・榎田長. 日本原色虫えい図鑑. 全国農村教育協会, 1996, pp.215.

た糞、その上側にバラバラの糞が数個)。ちなみに、イノシシでは糞はもう少し大きく、それが5〜7センチの団塊となりますから区別は容易。角はぜんぜん違う

名前に「シカ」とついているニホンカモシカですが、「シカ」でなくてウシ科の動物です。ウシ科のニホンカモシカとシカ科のニホンジカは角がまったく違います。

ウシ科の角

ニホンカモシカはレイヨウ(オリックス、ガゼルなど)、ヒツジ、ウシと同じく雌雄とも角があります。角はシカのように落ちることはなく成長し続けます。角は枝分かれせず、また、中は空洞になっているので「洞角」と呼ばれ、角笛や角杯として活用されます。

シカ科の角

一般に枝分かれするので「枝角」とも呼ばれます。角をもつのは雄のみ(トナカイは例外)。角は中まで詰まっっていて空洞になることはありません。

初春になり角は脱落しますが、その都度、新たな角が新生されます。0歳では角はなく1歳になり一本角が生えます。ニホンジカの場合、2歳になると二つに枝分かれし、3歳だと三つ枝、4歳になると四つ枝になります(以降は増えません)。図2は4歳以上の雄の成獣です。

名前も姿も似ているカモシカとシカですが、ずいぶん違います。

イベント情報

筑波大学公開講座

「菌類相調査入門編 ―自然
界のキノコ・カビの多様性を
調べよう―」

オンライン講義で菌類の分類学と生態学の基礎、現地実習で菌類を観察、採集し、顕微鏡を用いて同一する一連のプロセスを学びます。また、地域の生物多様性調査の重要性や、市民参加型調査の学術的貢献への可能性を考えます。

●日時と内容

第1回 6月1日(月) 17時30分～20時

「オンライン講義」菌類相調査および市民参加型調査の概説、菌類分類学概論、菌類生態学概論

第2回 6月6日(土) 10時～15時

「現地実習」フィールドでの観察採集、顕微鏡観察とまとめ

●現地会場 菅平高原実験所

●講師 出川洋介(筑波大学准教授)

●対象 高校生以上 ●定員 24名

●受講料 3,800円(一部のみの参加でも講習料は全額となります)

●お申し込み 4月1日(水)～4月30日(木)の期間に左のフォームから。定員になり次第締め切らせていただきます。

●その他

・山岳科学センターウェブサイトに実施要項を掲載します。

・交通手段や宿泊は各自で手配してください。



問 筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所
☎0268・74・2002(平日9～17時)
✉suga-jimu@msc.tsukuba.ac.jp

まちなかキャンパスうえだ 市民向け講座(開講予定)

①発酵食品の世界 ～こうじの起源をさぐる～

様々な発酵食品生産のもとになる「こうじ(穀物にカビをはやしたもの)」はどのように成立してきたのか、2025年2月の講座に続きその起源を探ります。

●日時 4月28日(火) 18時～20時

●会場 まちなかキャンパスうえだ(上田市中央2・5・10丸陽ビル1階)

●講師 出川洋介

●対象 中学生以上 ●定員 30名

●お申し込み 4月1日(水)以降、まちなかキャンパスうえだホームページ「市民向け講

座 参加申し込みフォーム」、またはお電話かメールでまちなかキャンパスうえだまで。

②塩田のため池草原における生物多様性の保全 ―上田モデルの提案―

塩田平のため池の草原植生を保全管理することで、堤体のグリーンインフラ機能維持を目指す「上田モデル」について学びます。

座学終了後、希望者は塩田のため池(枅池、塩吹池を予定)の現地観察会に参加できます。観察会は16時～17時30分、現地集合及び解散。

●日時 6月13日(土) 13時～15時

●会場 まちなかキャンパスうえだ

●講師 津田吉晃(筑波大学准教授)、丑丸敦史氏(神戸大学教授)、関田裕道氏(塩田まちづくり協議会)、水出博司氏(日置電機株式会社主幹)

●対象 中学生以上 ●定員 30名

●お申し込み 4月以降にまちなかキャンパスうえだホームページでご確認ください。

問 まちなかキャンパスうえだ

☎0268・75・0065(FAX兼用)
火～土曜日 12時～18時30分

✉machicam.u@gmail.com

本通信の印刷・配布は

東郷堂様にご協力いただいております

次号は6月発行予定です